

前田家本『承久記』論

原田敦史

源実朝横死の後、北条義時は次のように野心を抱いたと、慈光寺本『承久記』は記している。

爰ニ、右京権大夫義時ノ朝臣思様、「朝ノ護源氏ハ失終ヌ。誰カハ日本国ヲバ知行スベキ。義時一人シテ、万方ヲナヒカシ、一天下ヲ取ラン事、誰カハ諍フベキ」。注1(304頁)

この義時に対して、後鳥羽院は不快の念を募らせていた。

源氏ハ日本国ヲ乱リシ平家ヲ打平ラゲシカバ、勲功ニ地頭職ヲモ被^レ下シナリ。義時ガ仕出タル事モ無テ、日本国ヲ心ノ儘ニ執行シテ、動スレバ勅定ヲ違背スルコソ奇怪ナレト、思食ル、叡慮積リニケリ。(304頁)

こうして院は、「御腹悪」しき心性ゆえに「王法・王威モ傾キマシマス覽ト覚テ浅猿ケレ」といわれ、その危惧の通りに「忽ニ兵乱

ヲ起給ヒ、終ニ流罪セラレ玉ヒケル」事態を引き起こす存在として登場する(305頁)。大乱へと至る道は、このときに開かれたのである。だが、『承久記』諸本の中でも慈光寺本に比して後出とされる流布本や前田家本では、この点が大きく異なっている。本稿で主たる検討対象とする前田家本によれば、以下のようなのである。

王法つきはてさせ給ひ、人臣世を背し故をいかにとたづぬるに、地頭領家相論の故とぞ聞えける。上古は地頭といふことなかりしを、故鎌倉右大将頼朝、平家を亡しける勳賞に、文治元年の冬の比、日本国の惣追捕使并征夷大將軍補し給ふ故、国々ニ守護を、きて郡郷ニ地頭をすへ、既に段別ニ五升宛の兵糧米をあて取。是ニ依て領家は地頭をそねみ、地頭は領家を軽しむ。注2(上之ウ)

後出本のもう一方の代表である流布本も、同様に描く。両者の共通祖本段階における改編であるらしいが、西島三千代氏注3が指摘さ

れたように、ここでは「乱の因子の萌芽が義時の時点から頼朝時代へ遡らされ」ているのである。

『承久記』諸本について考える上で、これは極めて重要なことである。原因は、頼朝が幕府を開いた時点において、その根幹たる制度の中にすでに内包されていたという。野望を抱く義時と、全てを思い通りにしなければ気が済まない後鳥羽院という二人の個性の中に、発端を認めるのではない。対立の根は、つまりは幕府の存在そのものだったということなのだ。幕府という組織・集団が存在するがゆえの問題なのであり、幕府ある限り対立はいずれ表面化せざるを得ない。

そう書き換えたことの意義は多大である。その変質は、強烈な個性を持った二人の対立の構図^{注4}、義時の野心成就^{注5}への道のり、それを可能にした「果報」の論理^{注6}などといった、慈光寺本の叙述を支えていた柱を、全て無用のものとするだろう。発端部の改作はそれほどに重く、そして後出本のうちでも特に前田家本がその意義をよく受け止めていると、本稿は見ると、そう考えることによつて、これまで前田家本についていわれてきたことの多くも整理しやすくなるように思われる一方で、流布本にその傾向は希薄である。かつて前田家本は流布本を改作したものだといわれたことがあつたが、それが成り立たないことは論理的にも実例の上からも

明白であり、乱の根源を書き換えたことに關していえば、「天命による悪王の排除」を描くことに注力する流布本^{注9}以上に、その意義を活かしているのは兄弟関係にある前田家本のほうである。そのような観点で、前田家本を読み解いてみたい。

二

院に軍事行動を決意させる直接のきっかけとなる倉橋庄問題において、地頭を改易せよという指示を出した院に対し、北条義時は次のように拒否している。

義時御請、「彼庄の地頭は右大将の御時、平家追討の恩賞也。命^ニかはり、功をつみて給はりたる所也。義時が私のはからひ^ニあらず」と申ければ、(上11オ)

対立の根は、頼朝の時代の地頭設置にまで遡るものだった。幕府の存在そのものと不可分の構造的な問題であつたことを、この義時の言葉もまた示唆している。

すでに物語は、義時が「権威重くして国郡^ニ仰がれ、心正しくして王位を軽くせず(上10オ)」という人物であることを紹介していた。王位を軽んじないことは、後に義時が挙兵を決意する場面においても院への返答の中に記される(上35ウ)、基本的な性質であるらしい。そうした人物でさえ、幕府開設とともに手に入れた

権益は手放そうとしないのである。「右大将の御時」に手にしたものはたとえ帝王相手でも譲れないのだという発言は、対立の因が幕府成立時点のうちに内包されていたと描いていた発端部と、正しく呼応するだろう。地頭問題という頼朝時代以来の火種による衝突は、幕府ある限り避けられない必然だった。その幕府とは、「右大将の御時」を全ての淵源として、頼朝が打ち立てた体制を守つてゆく集団なのであり、義時たちはそれを旗印とする。義時の言葉はそう宣言しており、そしてこまでは流布本も概ね等しい。だが、右の点を基軸とする歴史叙述として成り立っているのは前田家本『承久記』なのだ、本稿では考える。独自の記事や表現に留意しながら前田家本の叙述を追いかけることによって、それを明らかにしてゆきたい。特に注記しない場合、以降の論述において引用する前田家本の本文は、流布本とは重ならない特色を持つものである。

頼朝による幕府開設こそが公武対立の根源だったが、その幕府にあつて頼朝が作り上げたものを遵守していくことがどれほど重要であつたかは、三代將軍断絶の時点においてすでに明瞭である。実朝暗殺の舞台となる右大臣拝賀の儀式に先んじて、都では議論が巻き起こつていた。かつて頼朝は、上洛して右大将を拜命した。にもかかわらず、実朝はなぜそうしないのかと、光親は疑義を呈

する。

何ぞ実朝自由、其身関東にありながら、結句卿相を都鄙の堺^二下して拝賀をすべしや。百官を土庭に定められて已来、いまだかゝる例を聞ず。(上4才)

これを「光親卿の異見条々、其謂あり」と聞いた摂政は、以下のように発言を続けた。

但、なに共たゞ実朝が申まゝに御許あるべしと覚ゆ。旧儀を乱り格式を違せば、官職は私^三あらず、神慮も御ゆるし有べし。(上4才)

文意不明瞭なところもあるが、鎌倉で拝賀を行うことの正否は神意が判断するはずだという主旨であろう。その直後に八幡の神前で横死を遂げるのであり、頼朝の先規に従わぬ実朝を、神慮は許さなかつた。

暗君頼家はいわずもがな、実朝でさえも、滅びたのは頼朝の道を踏み外したため^{注10}だったのだ。不慮に將軍を失つたことは、ただちに重大な危機を招く。

さても此世中いかになるべきぞ。誠^三闇夜^三灯をうしなへるにことならず。鎌倉殿には誰をかすへまいらすべき。(上8才)

重要なのは、前田家本が実朝の死を右のように意味づけていること、そしてその後の危機を収集したのが、他ならぬ義時であつた

と描いていることである。次期將軍が定まらない中で、阿野時元と源頼茂の二人が減びてゆく。

是こそよき源氏なれば、鎌倉殿にも立給はんずらんとて、侍共あまた随ふべしときこえしかば、鎌倉よりううたるべしとて、伊豆駿河の勢を以てせめられしかば、しばらく防たゝかひけれども、無勢なればうたれぬ。(上8オ)

頼朝の弟の子である時元は、こうして討たれた。流布本や『吾妻鏡』『六代勝事記』『尊卑分脈』などで義時の主導的な関与がはっきりと記される事件であり、波線部でそれをぼかすのは、前田家本に特徴的な筆致である。かつ、源氏であることを特筆する傍線部（これは流布本類似）は、続く頼茂誅殺において「是も源氏なるうへ、頼光が末葉なれと思召て（上8ウ。傍線部流布本なし）」、後鳥羽院が彼を討つたと記されていることと通じている。^{注11}次期將軍は源氏であるべきだとする前田家本の認識を見ておきたい。候補者が立て続けに失われてゆく混沌の中、親王將軍という選択肢は発案した後鳥羽院自身が撤回（上9ウ）、摂家將軍を迎える策が落とし所となるが、立役者は義時だった。

是は右大将頼朝の御妹婿、一条二位入道殿の御女、九条殿の北ノ政所にてましますば、其御ゆかりなつかしさに、義時申下しけるとぞきこえし。(上9ウ)

流布本や他の史料類に比しても、三寅擁立の経緯を義時一人の名によつて説明するのは前田家本の特色であり、その判断の根拠が頼朝との関係という一点にあつたとされることも、また同様である。^{注12}將軍の地位には頼朝の名残を受け継ぐ源氏が座るべきであり、義時はその路線を何とか守ろうと尽力している。時元の死に関与しないのも、それゆえだろう。頼朝が遺した体制の護持者たる存在として、義時は登場するのである。実朝の死の背後に院の呪詛があつたことをいう記事にもそれは明らかで、後鳥羽院はすでにこのときから「関東を亡さん」ために実朝・義時への呪詛を行っていた（上9オ）が、効果は実朝に対してのみ現れたのだった。

頼朝の路線から外れた実朝が院の呪詛に敗れたのに対して、その道を守る義時には通じない。前田家本の描写は明瞭である。そうして義時のおかげで次期將軍問題に目処がついた矢先に院との対立が表面化してくるが、義時の立場はそこでも一貫している。彼が心正しく王位を軽んぜぬ人物であることを紹介（前掲。上10オ）した後に、院との軋轢を生じた事件として描かれる第一は、二科次郎盛朝という御家人が無断で院の西面に就任したことを、義時が厳しくとがめた一件だった。幕府の秩序を乱す行為を許さない義時は、盛朝の所領を没収し、院は返還を求めたが、義時は応じずに地頭を据えた。^{注13}（上10ウ）。公武対立の本質である地頭に関

する問題はこうして浮上し、続く倉橋庄問題において頂点に達するが、ここでも院の意向に背こうとする義時の判断が、「右大将の御時（上11才）」の先儀を守るという考えに基づくものであったことは、先に見たとおりである。

その論理は、個人の欲望や主義主張であることを超えて幕府の存在理由そのものであり、帝王相手にも退かぬ理由でもあるのであつて、義時はそれを遵守する存在として立ちほだかる。一方の後鳥羽院側は、いかなる理屈によつて敵対しようとしていたか。怒りを募らせる後鳥羽院の言い分は、次のようなものだった。

卒土の王土は、皆是朕がはからひ也。然を義時、過分之所存_ニ住して院宣を違背申こそ不思議なれ。天照大神・正八幡もいかでか御力を合せ給はざるべき。（上11才）

こうして軍事行動を決定した後鳥羽院は、在京していた関東武士である三浦胤義を語らう。院の要請を受け入れた胤義には、妻が前夫である頼家との間になした子を義時に殺されていたという個人的な恨みがあつたが、胤義自身が主張するところによれば、動機はそれではなかった。彼が第一に挙げたのは、

故右大将家をこそ重代の主君に頼奉りしか、此君にをくれ奉て、二代の將軍を形見_ニ存ぜしに、是にも別奉て後は、鎌倉_ニ

胤義が主とてみるべき人があらばこそ。別の所存なし。大底

みな是也。（上12才）

ということだった。関東へ刃を向ける根拠が、ここに出揃う。帝王として、思うままにならない義時を誅することは、神慮も認めはずだと言う後鳥羽院。三代將軍なき後、鎌倉に頼朝の形見と見るべき人物はいないと言う胤義。二人の言い分が正しいか否か、乱の行く末が明らかにするだろう。神明は院に味方せず、胤義もまた敗れ去ることは自明である。義時の存在と、彼が守ろうとした論理とはそのようなものであつたことを、前田家本は描き出してゆく。

三

事態が進行する中で、まず先に破綻するのは、胤義が言ったことのほうだった。三代將軍なき今、鎌倉を見限るのが当然だという主張に反して、幕府の団結は義時あるがゆえに維持されていた。それが明らかになるのは、後鳥羽院による伊賀光季追討の直後からである。最初の軍事行動を成功させた院は、勢いづいて周囲に「義時が為_ニ命をすつる者、東国にいかほどか有なんずか（上23才。流布本同）」と問いかける。諸人が阿る中で、城四郎ながしといふ武士は、次のように言い切った。

代々將軍の後見、日本国副將軍にて候。時政・義時父子二代

の間、おほやけ様の御恩と申、私の志をあたふることいく千
方か候らん。就中、元久^三畠山をうたれ、建保三浦を亡し、
より以来、義時が権威いよ／＼重して、なびかぬ草木もなし。
此人々の為^ニ命を捨^ル者、二三万人は候はんずらむ。

(上23ウ。破線部は流布本同)

敵方であるはずの人物を、これほどまでに高く評価するのである。
すでに義時は、「北条時政が嫡子、二位殿の御弟、実朝の御伯父な
り。権威重くして国郡^二仰がれ、心正しくして王位を軽くせず
(上10才。傍線部流布本なし)」と紹介されていた通り、彼の権威
は政子を介した將軍家との繋がりによる。^{注14}それが「將軍の後見・
副將軍」ということなのだろうが、畠山討伐・和田合戦を経てそ
の地位を固めてきたということもまた重要なのであつて、そうで
あるがゆえに、「義時が為^ニ命をすつる者」は大勢いた。この城四
郎の言葉が誤りでないことを、三浦義村が保証する。鎌倉へ到来
した義時追討宣旨を手に義村が義時のもとを訪れたとき、義時は
その手で私を討てと義村に迫つた。それを拒否して義村は言う。

口おしくも隔て給物哉。御命^二代り奉ること度々也。畠山亡
させ給し時も、義村身をすて、六郎^三組候。建保^二、一門を
すて、味方^ニ参候ぎ。忠實^一にあらず。いくたびも、三代將軍
の御形見にてわたらせ給ひ候へば、争か捨奉り候べき。

(上27ウ)

三代將軍との関係之源とする義時の権威と、彼のために命を捨て
る覚悟。それを畠山・和田との合戦を通じて確たるものにしてき
たことを言う義村の言葉は、先の城四郎の発言と正確に重なり合
い、すでに滅びた光季もまた、同じ思いで戦つていた。「義時かへ
り聞れんもはづかし(上17ウ)」という思いを抱いて戦場に臨み、
「南無鎌倉八幡大菩薩、光季唯今大夫殿の命^二代りて死^ニ候(上22
ウ)」と言つて討死を遂げたのである。

「三代將軍の御形見」である義時に御家人たちは従い、命を賭
けてともに戦い抜くことで、連帯をさらに強めてきた。將軍自体
は源氏が継ぐものであつて、「將軍の後見」「副將軍」が將軍を超
えることは^{注15}ないが、義時のために命さえも捨てようという者たち
の存在は、確かに鎌倉のうちにあつて義時を支え、義時は彼らの
団結の要となる。その義時が、頼朝の道を堅持してゆく。前田家
本において、幕府内部の結合はこのように捉えられるものなので
あつて、頼朝の形見となる存在がいなくなったとして京方につい
た胤義は、個人的な恨みのためにそこを見誤つていたのだろう。
だが、恨みの原因となつた頼家遺児の殺害さえ、「若公の禪師公の
御謀反^三同意しつらんとて、義時に誅せられけり(上13才)」とい
うのが実情だつた。体制の安定を旨とする義時の行動原理は常に

変わらず、幕府の維持に尽力する。その義時をリーダーとして団結した御家人たちが、院との避けられぬ戦いへと進み、勝利するのである。

出陣前に行われた北条政子の演説は、以上のことを総括するであろう。夫や子供との別れを重ねてきたことを嘆き、死にたいと願った政子を義時が止めたこと、それ以来、將軍たちの菩提と鎌倉の安泰だけを願って生きてきたが、今このような事態に直面してしまったこと。その口惜しさを述べた後に御家人たちを叱咤する政子の言葉の主眼が、「故殿の御恩」に報い、三代將軍の墓を守るために戦えという点(上31ウ)にあることなどは、流布本と大きく異なるものではない。^{注16}その上で、前田家本において目立つのは、次のような一節である。

故殿の御なごりとは、御方をこそ仰まいらせ候へ。義時が人に所をかれ候も、全高名にあらず。併御事故にてこそ候へ。

(上30ウ)

子供と死別し、死にたいと嘆いた政子に対して、義時がかけた言葉である。あなたは頼朝の唯一の名残であり、私の権威もそれによって来している。あなたの存在は今の鎌倉に不可欠だ。そう言われて思いとどまった政子は、

げにも、故殿の御末たえんことも悲しくて、思ひにしなぬ身

となりて、せめてのゆかりをたづねて將軍をすへ奉りて、此二三年は過候き。たとひわが身なく共、鎌倉の安からん事をこそ草の陰にてもみんと思ひつるに、忽、牛馬の牧とならんずらんこそ口おしけれ。(上30ウ)

と答えた。義時と同じく、政子もまた鎌倉の安泰のためにこそ生きてきた。「故殿」の遺風を守るため、三寅の招聘も果たしたので。その体制を補佐し維持していくことが彼らの務めなのであり、ゆえに御家人たちを叱咤した後、政子は次のような行動に出る。

赤地のにしきの袋に入たる金作の太刀二振、手づから取出して、「是ぞ故殿の身をはなち給はぬ御はかせとて形見に持たれども、是が鎌倉のあるかどでなれば」とて、足利殿に進らせらる。(上31ウ)

頼朝の遺品である太刀を、足利殿に授けたという。ここに足利幕府成立後の時代相を認めることは、^{注17}おそらく正しい。だが本稿にとって重要なのは、頼朝の遺風を直接に受け継ぐのは源氏であるべきであつて、北条氏はその補佐でしかないという認識が、こうして明示されていることである。彼らは頼朝との関係を権威の源泉とし、後見人・副將軍として、頼朝以来の体制の安泰を守り次代へと伝える。その義時のもとに団結した御家人たちが、幕府存在の根本を問う戦いに挑むのである。前田家本が描き出した戦い

の構図は、以上のようにまとめることができるだろう。

四

長村祥知氏は、院の企てはあくまでも義時個人の排除を狙いとしていたと記す慈光寺本に比して、院が幕府を討つために挙兵したのだと、叙述を変容させた最初の文献が『吾妻鏡』であったことを述べている。他の『承久記』諸本も同じように記し、幕府という組織の存在の根幹に関わる戦いであったと描こうとする。ことまた、『吾妻鏡』に似るといえるのかも知れない。実朝が、頼朝の道から外れて滅びてゆくという描き方も、『吾妻鏡』に見られるという。^{注10}だが、『吾妻鏡』が北条泰時を頼朝の後継者と認め、頼朝から泰時への継承を正当化しようとする歴史観によつて^{注10}いるのに対して、足利幕府にまでも通じる源氏將軍体制の護持者として北条氏を位置づけている点は、前田家本に固有である。頼朝以来の道を守り伝えることが義時の、幕府の務めであり、御家人たちもその旗印のもとに立ち上る。幕府が成立したときから内包されていた公武の対立という構造的な問題に、いかにして決着がついたのか。それを如上の構図のもとに描き出している点に、流布本とも異なる前田家本の個性はある。

以上を踏まえて、本節では合戦場面の検討に進みたい。「右大将

の御時」に作られた体制を守ることは、こうして帝王相手にも譲ることのできない一線であった。だが、彼らは一体なぜ、そこまですなければならなかったのだろうか。事が幕府存在そのものに関わる問題であったとして、なぜ彼らはそのために、数多の危険を冒して強大な敵に挑もうとするのだろうか。前田家本を読み進めてゆくために、それは不可欠の観点であり、倉橋庄の地頭問題が生じたときの義時の言葉を、ここで振り返っておきたい。

義時御請、「彼庄の地頭は右大将の御時、平家追討の恩賞也。命^ニかはり、功をつみて給はりたる所也。義時が私のはから

ひ^ニあらず」（上11オ）

これは流布本と概ね等しいと、先には述べた。流布本には以下のようにある。

権大夫申ケルハ、「地頭職ノ事ハ上古ハ無リシヲ、故右大将平家ヲ追討ノケンジャウニ、日本国ノ惣地頭ニ被^レ補、平家追討六箇年ガ間、国々ノ地頭人等、或ハ子ヲウタセ、或ハ親ヲ被^レ打、或ハ郎従ヲ損ズ。加様ノ勲功ニ随ヒテ分チタビタラシ者ヲ、サセル罪ダニナクシテハ、義時ガ計ヒトシテ可^ニ改易^一様ナシ」トテ、是モ不^レ奉^レ用^{註11}。（12）

両者の差異に、新たに注目していく必要がある。地頭職とは、多大な犠牲を払って獲得した恩賞であったと語る点において、両者

は近い。それを否定することは、幕府の存立を否定することだ。だがその犠牲とは、流布本においては肉親や郎等の死であったとされるのに対して、前田家本では彼ら自身が命がけて戦ったことを指すのである。自らの命を危険にさらし、血を流して戦い勝ち取った軍功であること。地頭職とは、その末に成立した幕府の権益だったのだ。そう意義づけていることが、合戦譚を読んでゆく視座となる。命がけて得たものが侵されようとするとは、断じて容認できない。ならばもう一度、命がけて戦うしかない。そうすることによってしか、守ることはできないはずだ。ここでの流布本との相違は、微細でありながら、以後の叙述内容と密接に関わって物語の筋道を形作る。自らの血で勝ち取った成果が奪われようとするならば、再び命がけて戦わなければならない。それが彼らを守るうとしたものの本質なのであり、だからこそ、義時のもとに集うのは、「命に代わる」覚悟のある者たちでなければならなかったのだろう。その戦いを、前田家本は描くのではなかったか。前田家本が、命を惜しまず戦おうとする者たちの姿を、殊に印象的に、繰り返し描くのは、如上の理由によるのではないかと考えたのである。

前田家本において、合戦場面の本文は流布本に比して略述の傾向が目につくことが多いが、右のような観点から注意されるのは、

たとえば次の一節である。大炊渡の合戦において、武田五郎・小五郎父子は、「(作戦実施は)明日とはの給つれども、目_二見たる敵をいかでか一夜までは遁すべき(上44ウ)」という判断から、直ちに渡河戦を決行する。それを見て同じく渡ろうとする者も多かったが、対岸に布陣する敵から激しい抵抗にあい、成功したのはわずかに一人二人だった。武田父子はそれでもなお進もうとする。

武田五郎渡らんとしけるに、相具してわたる輩、同六郎、千野五郎、太郎、矢鳥次郎、と、ろきノ次郎、五郎を先として百騎ばかり、河波白くけたてゝわたらんとしけり。敵是を見て川岸_二歩せ、矢さきをそろへて雨のふる如く、射すくめられて、川中_二ひかへたり。武田五郎信光、鞭をあげて川の東の岸_二ひかへて鎧踏張、「いかに小五郎、日比の口にも似ず、敵に後を見せて東へ返す物ならば、信光爰にて汝を討_二ずるぞ、たゞ其河中にてしね_二、返すな」とぞ呼たる。小五郎是を聞て、「唯しねやく、者共」とて、鞭をあつ。百騎あまり同頭にはせ渡す。舟も逆茂木も蹴ちらして、轡をならべて向の岸へぎとかけあがる。父是をみて、小五郎討すなとて、一千余騎馳わたす。小笠原次郎長清、遠山左衛門是を見て、鞭を上て馳つく。是を始として、山道の手五百余騎、旗の頭を一_ニして、一騎ものこらずうちわたす。(上46才)

武田親子の突破によって戦局は一気に動き、勝利をもたらした。これを流布本に比すれば、同場面には、

武田小五郎、懸テ打入テ渡ケリ。伴フ輩ハタレノゾ。(中略)

以上九人、是等ヲ始トシテ百騎ニ足ヌ勢ニテゾ渡シケル。京勢ハナシケル矢、雨ノ足ノ如ナレバ、或ハ馬ヲ射サセ、或ハ物具ノスキヲ射サセテ河へ入。是ヲモ不顧、乗越々々渡シケル。武田五郎、懸テ統ヒテ河端ニ打望テ、「小五郎、能コソ見ユレ。日来ノ言ニテ能ク振舞へ。敵ニ後ロヲ見セテ此方へ帰ラバ、人手ニ掛マジキゾ。只渡セ。其ニテ死ネ」トゾ下知シケル。小五郎、元來、敵ニ目ヲ懸テ思切タリケル上、父ガ目ノ前ニテ角下知シケレバ、面モ不レ振戦ケル。小笠原次郎、被ニ出抜ケルゾト思ニ、安カラズ思テ、打立テゾ渡シケル。京方、各河端ニ歩向テ散々ニ戦ケレ共、東山道ノ大勢如ニ雲霞 打入々々渡シケレバ、力不レ及引退テ、上ノ段へ打上ル。

(42・43)

とある。武田父子は功名心から小笠原を出し抜こうとしていたにすぎず、事前に入念な瀬踏みも実施していたことが、直前に記されている。抜け駆けに気づいた小笠原は負けじとすぐに追いかけているが、「東山道ノ大勢」が武田を先頭に一丸となつたわけでもない。命がけの果敢さこそが困難な戦況を一挙に覆したのだと描

く点において、前田家本の方がはるかに劇的な構成になっていることがわかるだろう。その後の乱戦の中には、

大妻太郎は、始めより命おしむ共みえざりけり。(上47ウ)

という記述も現れる。防衛線を破られた京方の武士だが、奮戦して自害を遂げたという。命がけで戦う武士たちの姿に、こうして前田家本は熱心な視線を注ぎ、その一方では、

小笠原次郎進出て申けるは、「身をおしむには候はず。関山にて馬共多く馳ころし、又大炊渡にて手のきは合戦仕て馬も人もせめ伏て候」。(下6オ)

という場面も用意している。困難な役割をあてられた小笠原は軍勢の消耗を理由に渋るのだが、その言い訳にも「身をおしむには候はず」という一言が不可欠なのだ。命を惜しまず戦うことの重要さを、これらの記述は表している。

命の安危に関わるような傷にもたじろがぬ姿を描くことにも、前田家本は積極的である。

相良三郎、額を射ぬかれて、若党の肩にかゝりてありく。道

に休みて矢をぬくに、柄ばかりぬけて根はとまる。(下2ウ)
流布本には該当のない話題で、残った根を無理して抜いたために相良は息絶える。やがて意識を取り戻した相良を周囲の者たちは帰国させようとするが、相良は聞かず、「口おしきことをする奴原

かな。西へかくべし。死なば宇治川に_二なげ入_一よ(下3ウ)」と豪語した。致命的な傷を負つてもなお闘志の衰えぬ様を、前田家本は活写するのである。あるいは、次のような場面もある。

秦野五郎、馬手の目射ぬかれて矢を立ながら、大将の御前にぞ参たる。「枕瀬川の額の疵だにも神妙なるに、誠_二有難_一し。

鎌倉権五郎再誕か」と誉給。(下18オ)

宇治橋の戦における一幕だが、傍線部は流布本には見られない。顔面に負つた二つの傷をもともせず_二に戦い続ける姿に賞賛が向けられたことを、前田家本は記す。同じ宇治橋の戦では、敵の射撃によつて足を橋に射つけられてしまう者もいた。身動きができなくなった角田左近は、子が防戦してくれている間に「太刀にて矢の立たる足を_二切わりて(下18ウ)」脱出し、子に担がれて退避して賞賛を浴びた。京方の山僧円応も、同様に足を橋に射つけられたが、自ら「長刀にて足頸よりふつと打切て(下18ウ)」逃れ、「弥鳥のごとく」翔り狂つたという。二つ並べられた類似のエピソードのうち、流布本で該当するのは後者のみ、それも足の指を射つけられ、味方に助けてもらうだけの話である。重傷をもともせず_二に戦う姿と、それを支える強靱な精神力を、前田家本はことさらに特筆しているのだ。

五

前田家本の合戦譚の中には、岸本洋輔氏^{注2)}が、「流布本『承久記』は、現実的な身体感覚のもとで苦痛や死を避け、生きること志向する人々の姿を多く描き出す」と分析されたのとは、大きく異なる表現世界がある。命を惜しまぬ姿、命の危険を伴うような重傷を負つてもなおひるまぬ姿を、前田家本は好んで描き出す。彼らの戦いぶりは、「命_二かはり、功をつみて(上11オ)」獲得した幕府という体制を守るために戦うのだと述べられていたことと、正しく対応するであろう。そうした叙述態度は、乱中最大の激戦であつた宇治川における渡河戦の描写において、最も強く顕現する。橋上の戦闘では埒が明かぬまま、北条泰時率いる鎌倉勢は、作戦を渡河に切り替える。そこから開始される戦いにおいてまず繰り広げられたのは、佐々木信綱と芝田兼吉による先陣争いだった。

「此川_二は代々我家_一わたしたるを、今度人にわたされんこそ口おしけれ。信綱是を知らず生ても何かせん」と……(下20オ)

信綱は、死を賭して芝田への対抗心を燃やしている。そのまま川中へと進んだ信綱は、

「近江国住人佐々木四郎左衛門源信綱、十九万騎が一番か

けて、此川に命をすて、名を後代ニ留るぞ」とおめいて打出す。(下21オ)

と、やはり死の覚悟を叫んで渡河を成功させた。他の軍勢もそれに続くが、多くの者たちが激流に飲み込まれてゆく。

阿保刑部真光、塩屋民部家綱、今年八十四、おしからぬ命かなとて打入けり。一目もみえず失にけり。

(下22オ。流布本同)

以後、流される者が続出し、犠牲者の名が逐一記されてゆく(流布本同)中で、大將軍の泰時ははじめて恐れを抱いた。

武蔵守此を御覽じて、「泰時が運已ニ尽にけり。帝王ニ弓を挽故也。此上は生ても有べからず」と、手綱かいくり馳入んと

し給所に…(下23オ)

先ほどの橋上の合戦に際しては、激しい雷雨に多くの者が帝王に弓引くことへの恐れを抱いておびえる中、全くひるむことのなかった唯一の人物が、泰時だった(下17オ。流布本同)。その泰時が今、恐れをなして死に急ごうとしているのである。春日刑部三郎は驚き、なんとかそれを止めようとする。^{注23}

味方の軍兵今川に沈といへども、三千騎の内外也十が一だにも失ざるに、大將命をすて給事や候べき。(下23ウ)

春日が馬の口にとりついて必死で制止したために泰時は動けなく

なるのだが、その様子をもどかしく見ていた泰時の子時氏が、宇治川に入ろうとした。時氏は、高らかに決意を叫び、激流に挑む。

小大郎時氏、父わたらんとするが人に留らるゝと見て川に打れんとするを、安房国住人佐久目太郎家盛と名乗て轡こと取付。(中略。家盛の制止) 太郎殿腹をたて、「何条去事有べき。親のひかへ給へるだに口おしきに、二人此川をわたさずは、板東の者誰を見て渡すべきぞ」。(下24ウ)

もちろん周囲は止めようとするが、時氏は聞かない。家盛を鞭打つて振りほどこうとする時氏に、家盛は「指つめ(下25オ)」までして諫言するが、いきり立つばかりの時氏に、とうとう家盛はあきらめ、

家盛、「わ殿のことを思奉てこそすれ。さらばいかに成はて給はん共心よ」とて、馬の尻をはたとうつ。何かたまるべき。

河に打入けり。(下25オ)

こうして時氏は川へと入り、家盛らも見捨てずにそれを追った。さらに、

武蔵守是を見て、「太郎うたすな、武蔵相模の者共はなきかく」と宣へば、一騎ものこらず打入けり。廿万六千騎、こゑこゑに名乗てわたしけり。一騎も不不沈、向の岸ニ打あがる。

(下25オ)

我が子の姿を見た泰時の号令によつて、二十万六千騎が川を渡す。時氏の行動をきつかけとして、膠着していた戦局は一挙に決したのだつた。

流布本にも該当の場面は描かれるが、様相は大きく異なつてゐる。「帝王ニ弓を挽」恐れを、泰時が抱くことはない。父が止められた後に川へ入ろうとした時氏に至つては、

武蔵守太郎殿ハ其モ渡サントテ、河端へ被_レ進ケルヲ、「如何ニ泰時ヲ捨ントハセラル、哉覽。一所ニテコソ兎モ角モ成給ハメ」ト宣ケレバ、力不_レ及シテ留リケリ。サレ共猶渡サントテ、河端へ被_レ進ケルヲ、小熊太郎取付テ：(76)

と記されるのみで、心中の断固たる思いは、全く語られないのである。両本の落差は著しい。止めようとした小熊を鞭打つと、小熊はすぐに手を離し、

其時、武蔵太郎颯ト落ス。関判官代実忠、同渡シケリ。小熊太郎モ渡ス。三騎無_レ傾向ノ岸ニ著ニケリ。爰、万年九郎秀幸ハ、真先ニ渡シタルゾト寛シクテ、向様ニゾ出来タル。武蔵太郎、是ヲ御覽ジテ、「汝ガ只今參タルコソ、日比ノ千騎万騎ガ心地スレ」ト宣ケル。去程ニ、相模国住人、榎尾三郎景高、京方ヨリ宗徒ノ者ト見ル敵ノ呼ヒテ出来ケルニ、押双ベテ組デヲツ。(76・77)

と続く。時氏はわずか三騎で渡河したにすぎず、万年九郎に先じられてもいたらしい。彼の渡河が一気に大軍を動かしたこともなつておらず、鎌倉方が宇治川の防衛線を破つた決定的瞬間が奈辺にあつたのか、前後を読んで明^{注24}でない。一方の前田家本が、時氏の命がけの覚悟と行為こそが、最も困難な局面を打開して、乱全体の勝利を決定づける契機となつたのだと描き出していることは明瞭であり、先に見た大炊渡における武田小五郎の場合とも相似する。一步間違えれば単なる蛮勇にすぎなくなるほどに危険な行動だが、ここではそれが、王に背く恐怖にすら打ち勝つて、勝利を掴むための唯一の手段だったのである。大將軍が率先してそれを行うことが、活路を開いたのである。

六

勝利を掴み取るためには、命がけの覚悟が必要だつた。前田家本がそのことを幾度も強調して描くのは、彼らの守ろうとしたものが、「命^ニかはり、功をつみて」手に入れたものだったからだ。その根本を否定しようとする相手に対してもう一度、彼らは命がけの戦いを挑み、死をも恐れぬ行為が、幾度も活路を切り開く。北村昌幸氏は、

(前田家本は―引用者注) 戦場を駆けめぐる武士たちの姿を

活写し、彼らの行動力そのものが難局を切り開いていったというニュアンスで、合戦の一部始終を語っている。おそらく真に目指していたのは、朝敵であることの葛藤を乗り越えて勝利をもち取る武士たちの、生々しい姿を描くことだったのではないだろうか。^{注25}

と述べられているが、そのことの意味を、本稿は右のように理解する。以後の叙述の中にそれらの総括を見いだし、論を終えたい。宇治川を突破した関東勢によって洛中が蹂躪される中、「最後の御供」のために参った武士たちに向かい、後鳥羽院は

我は、武士向はゞ手を合て命ばかりをば乞んとおぼしめせども、汝等参籠て防戦ならば、中々悪かりなん。(下29才)

と告げ、立ち去るように指示した。怒りに震える山田重忠は、院のことを「日本一の不覚人(下30才)」と罵倒する。命を賭ける覚悟のない院に、もとより勝ち目はなかったことが明らかになる一方で、その無様な姿とは対照的に、京方にも「よき軍して死なん(下30ウ。流布本同)」とする者たちがいたことを見届けて、前田家本の合戦場面は終わる。

締めくくるのは、ここでも北条政子の言葉だった。戦勝報告と犠牲の詳細、戦後処理に関する指示の要請などが鎌倉に届くに及び、政子は

二位殿あまりのことに涙をながし、先若宮大菩薩を伏おがみ進んで、やがて若宮へ参らせ給ひけり。それより三代將軍の御墓へまいらせ給て御悅申有ければ、大名小名馳集て御悅ども申あはる。其中にも子うたれ親うたれぬと聞人、悦につけ歎につけて、関東はぎゝめきのゝしりあへりけり。(下38ウ)多くの命と引き換えに、「三代將軍」の跡を守り抜いたことを、前に告げたのである。

こうして、双方に多大な犠牲を出して戦いは終わり、関与した貴族たちは処分され、後鳥羽院は配流された。それは、

平家の乱世^{三六}、後白河院鳥羽殿^{三七}遷らせ給しをこそ世の不思議とは申ならはしゝに、今は遠き国へながされさせ給ふ。先代にも超たること共也。(下45才)

という、かつてない事態であったが、全ては神慮によるものであり、「天照大神・正八幡もいかでか御力を合せ給はざるべき(上11ウ)」という後鳥羽院の言葉が全て誤りであったことを、結文が総括する。^{注27}

抑承久いかなる年号ぞや。玉体ことかく西北の風に没し、卿相みな東夷の鋒^{三八}あたる。天照大神・正八幡の御はからひなり。王法此時かたぶき、東国天下を行べき由緒にてや有つらん。御謀反の企のはじめ、御夢^{三九}黒き犬御身を飛越^{四〇}と御覽

じけるとぞ承る。かく院のはてさせ給しかども、四条院の御末たえしかば、後嵯峨_二院_一位まいりて、後院と申。土御門院の御子なり。御うらみは有ながら、配所にむかはせ給き。此志を神慮もうけしめ給ひけるにや、御末めでたくして、今の世に至るまで此院の御末かたじけなし。承久三年の秋にこそ、物の哀をとゞめしか。(下52ウ)

「王法此時かたぶき、東国天下を行」ことは、「天照大神・正八幡の御はからひ」だった。企ての当初から夢告によつて暗示されていたはずのことだったが、院の見た夢の内容が、実朝暗殺時に出現した「黒き犬(上6才)」を想起させることは、誰の目にも明らかである。頼朝の遺風に背き、それを破壊しようとした点において、二人は共通する。彼らの滅びを容認したということは、頼朝の遺風を守るために戦つた義時たちのことを、その体制がこれからも存続していくことを、神々は認めたということである。「命_三かはり、功をつみて」勝ち取つたものは、再び命がけて戦うことによつて守られた。敗者の末路がどれほどの嘆きや「哀」に満ちても、戦いの結果は神慮であり、「卿相みな東夷の鋒_二あた_一る」ことさえも受け入れなければならない。

前田家本の描く承久の乱とは、以上のような出来事である。そこに後代の色づけが加わっていることもすでに見たとおりだが、

発端部において公武対立の根を遡らせ、幕府という組織の存在と不可分の問題として描き直した改作の意義を受け止めた歴史叙述の形が、確かに前田家本のうちにはある。『承久記』諸本における前田家本の意味を、その点に認めたい。

注

注1 新日本古典文学大系により、()内に引用冒頭の頁数を示す。

注2 『前田家本承久記』(二〇〇四年、汲古書院)により、()内に引用冒頭の丁数を示す。私に句読点等を付し、ルビは削除、清濁は適宜あらためた。

注3 『慈光寺本『承久記』の乱認識』(国文学研究)130。二〇〇〇年三月。

注4 大津雄一氏『慈光寺本『承久記』の文学性』(軍記と語り物)17。

一九八一年三月)。

注5 西島氏前掲注3論文。

注6 拙著『平家物語の表現世界―諸本の生成と流動―』第三章第三節

(二〇一二年、花鳥社。初出二〇一二年)。

注7 日下力氏『前田家本『承久記』本文の位相』および西島三千代氏

『承久記』研究における発見のいくつか。ともに注2前掲書所収。

注8 前掲注6拙著第三章第四節。初出二〇一二年。

注9 前掲注6拙著第三章第五節(初出二〇一三年)では、『六代勝事記』の思想との関連から、この問題を論じている。

注10 大津雄一氏『前田家本『承久記』の「源氏志向」とその意味』(古

典遺産」31、一九八〇年十一月）は、前田家本が「三代將軍」を重視していることを述べる。適切な指摘だが、その中でも頼朝こそが特別な存在であることに、本稿では留意したい。また敦本勝治氏『吾妻鏡』の合戦叙述と（歴史）構築」第六章（二〇二二年、和泉書院。初出二〇二〇年）は、『吾妻鏡』において、頼朝の正しき継承者であった実朝がやがて頼朝の政道から外れて死んでいくのだと描かれていることを指摘する。注目すべき見解だが、例証として挙げられている『吾妻鏡』の記事に、右大臣拝賀のことは含まれない。そもそも、後鳥羽院の関与で行われた右大臣拝賀に際して、前田家本が記すような批判が現実にあつたのかどうか、記録した書物を知らない。

注11 大津氏注10論文は、「前田家本には、源氏という氏に対する特別な意識がある」ことをいう。

注12 実際には、慈円の働きが大きかったという。坂口太郎氏『愚管抄』成立の歴史的前提」（『日本中世の政治と制度』所収。二〇二〇年、吉川弘文館）。

注13 流布本には、地頭についての言及はない。

注14 大津氏注10論文に指摘されている。

注15 先述した義村との会話においては、義時が義村のことを「三代將軍蘇生りてわたらせ給ふとぞ見奉（上28才）」とさえ言っている。また「後見」に関しては、これも先に触れた後鳥羽院による追討宣言に対する返答において、「將軍の御後見として罷り過候、王位を軽じ奉ることなし（上36才）」と義時自身が述べている。

注16 頼朝の恩に報いるべきだという主張は、『六代勝事記』や『吾妻鏡』とも近い。

注17 原井暉氏「前田本承久記の作者の立場と成立年代」（『歴史教育』15—12。一九六七年十二月）。

注18 長村祥知氏『中世公武関係と承久の乱』第三章（二〇一五年、吉川弘文館。初出二〇一二年）。

注19 敦本氏注10前掲論文。

注20 敦本氏注10前掲書第七章。初出二〇一九年。

注21 新日本古典文学大系により、（一）に同書の段落番号を示す。

注22 『流布本・承久記』における身体・生命・倫理―（小さな物語）の連続に着目して―」（『軍記と語り物』48、二〇二二年三月）。

注23 このことを後に知った義時は、よくぞ止めてくれたと褒めている（下24才）。

注24 時氏の渡河によつて一気に戦局が動いたという描き方は、『吾妻鏡』もしていない。

注25 北村昌幸氏「前田家本『承久記』にみる王威と神意」（『日本文芸研究』61—1・2、二〇〇九年九月）。

注26 この叙述を、流布本は省略している。前掲注9拙稿参照。

注27 大津雄一氏「前田家本『承久記』の後鳥羽院と義時―その文学性の評価のために―」（『国文学研究』75、一九八一年十月）に、指摘がある。

注28 松林靖明氏「前田家本『承久記』の側面」（『中世の戦乱と文学』、二〇一八年、和泉書院。初出一九七七・七八年）。同論は、白い犬の

夢告によって義時が公曉の凶刃を逃れたと、『吾妻鏡』が記していることへの注意までも喚起して、示唆的である。

注
29

宇治川合戦後、滅びてゆく者たちの末路に関して前田家本が「あはれ」の語を用いる例は八箇所あるが、それらのうち流布本と重なるのは二例のみである。八例の中には土御門院の配流も含まれているが、彼が「まことの時はいろはせ給」わぬ人物であったことを前田家本は記して（下51ウ）、その末が皇統を継いでいくことを保証している。

（はらだ あつし 本学教授）